



文化の多様性と異文化 コミュニケーションスキル

山口 綾乃

(コミュニティ政策学科教員)

私は、ハワイ大学大学院で研究生生活を送ってきました。ハワイというロケーションはとても独特な環境であり、文化の多様性 (Cultural Diversity) を学ぶには最適な場所でした。英語で何かを考えるだけではなく、なぜ留学するのか？といった質問を投げられていたことを思い出します。ハワイ大学大学院教授との共同研究を通して、研究に関してより大きな価値を共創するという異文化コミュニケーションスキルを身につける機会をいただき、その異文化コミュニケーションスキルを実践教育プログラムで教える機会もいただきました。

立教大学に来て、私は学生にこういった新しい価値や役割を教える機会をいただくことができれば、専門の壁を乗り越えて新しい価値を見出すことができることを伝えたいと考えております。

大学院生時代：毎日が冒険

私は、日本人留学生としてハワイ大学大学院に進んだわけですが、毎日が冒険でした。まず、英語がわからないという前に、価値観が通じないといえよいのでしょうか、何をしているのかわからず、どうしてよいかもわからない日々。自分の常識や価値観が通じない世界、実に困り果てたことを思い出します。最初のころ、シンプルな英語の会話で混乱しました。

例えば、日本語の場合、友人と待ち合わせをしていた際、待ち合わせに遅れてしまった時の挨拶は、「遅れてしまってごめんなさい。」となりますが、英語では、“Thank you very much for waiting for me. (待っていてくれてありがとう)” という表現になります。なぜ、感謝なのだ？と思ったことを思い出します。これがまさに文化の多様性という問題なのです。日本文化は、面子を大事にしますので、あえて相手の前でへりくだったりすることが多いですが (相手の顔を立てるという意味)、アメリカ文化では、個人の面子を大事にしますので、自分の権利主張

を大事にします。だからこそ、相手に待っていてくれてありがとう（感謝を示す）となるのだと教わりました。

留学して数年たったころ、ある授業で日本から来たばかりの日本人留学生に出会いました。とある必修クラスの課題について話をしているときでした。課題の論文について、私が何気に“It's up to you.”といったのですが、これが問題となっていました。つまり、“It's up to you.”という言葉は、私に取ってみたら、自分のやりやすいようにテーマを決めて課題である論文をまとめなさいと前向きにとらえていたのですが、その学生はこの言葉の意味を解釈した際、教員に突き放されたと否定的に感じていたわけなのです。これもまさに、文化の多様性から来る問題なわけです。

研究について

留学していく中で、文化の多様性を学ぶ機会が多くあり、物事には様々な角度があるという事を学びました。こういった経験をぜひ研究にも生かしていきたいと考えている日々です。

コミュニティ福祉学部のキーワードである「コミュニティ」という考え方は、米国ではSmall Groups（小さなグループ）というとりえ方をする傾向があります。今までは、個人レベルでの幸福感モデル、健康行動という研究が主流とされてきました。しかしながら、グローバル化に伴い人の幸福感や生きがいも多様化する時代となって、これまでの既成の枠組みでは対応できない時代になってきています。したがって、新しい考え方として、包括的な幸福感、生きがい、そして、人々が充実した社会活動がおくれるような包括的なまちづくり、地域活性化モデルを生み出す必要があるといわれています。まさに、この包括的な枠組みこそが、このコミュニティ福祉学部の「コミュニティ」の考え方であると私は信じております。

グローバル化に伴い人の幸福感や生きがいも多様化する時代となりました。これまでの既成の枠組みにとらわれず、人々の幸福感や生きがい、健康度を調査しているミシガン大学、ウィスコンシン大学、スタンフォード大学が所有しているMIDUS（Midlife in the United States）とMIDJA（Midlife in Japan）という日米二つのデータベースを積極的に活用し、中高年期を対象として生きがい、まちづくり、地域活性化モデルを作り上げることを目標としております。私自身が、日米における人々の幸福感研究に携わっている関係から、ハワイ大学だけではなく、ミシガン大学、ウィスコンシン大学、スタンフォード大学との連携も図っていきます。さらに、まちづくりと社会関係資本という研究に携わっている関係か

ら、ハーバード大学とも連携を図りながら、日本の新たなまちづくりや高齢化社会問題に取り組む一助となれば幸いです。先日、社会関係資本と健康研究で、ハーバード大学の教授に私の論文を引用していただきましたし、米国の国立国会図書館内にある医学書に認めていただきました。

日米比較研究で、米国人は「個人的な達成」に幸せを感じる傾向がありますが、日本人は「人間関係の協調」という結果が出ております。これまでの国際比較で、日本人の幸せ感是他国に比べ低く出たのは、日本人が幸せをつかみどころがないものと考えているためかもしれないという研究結果も出ております。今回の複数の調査で日米間の違いをはっきりさせれば、日本独自の幸せ感の尺度が見つかるかもしれません。少子高齢化などの社会問題からくる日本を覆う閉塞感を考える上でもこういった研究が役に立つのではないかと考えております。